



世代を超えて防災トランプを 楽しみ地域の自助共助を促進



神奈川わかものシンクタンク
代表理事 福本 壘

1 はじめに

私は「自分に必要な防災訓練を考え実践すること」「ご近所さんで助け合える関係をつくること」を課題とし、その取り組みの一步として防災に関する体験談や考えを楽しく共有できる「防災トランプ」を開発し、「世代や立場を超えて防災を楽しく考える場づくり」に取り組んでいます。

本稿ではその取り組みの内容、経緯、成果、今後の展望について紹介します。

2 取り組みの内容

防災トランプは通常のトランプルールをそのままに、カードに記載された52種類のお題から防災にまつわる体験談や考えを共有することでゲームを有利に進められるようにつくられています。

記載されているお題の例としては、「自宅にいるときに強いゆれが起こった」、「大型の台風が上陸した」、「身近な地域に向けてミサイルが発射された」、「感染症が流行している」等があり、自然災害に限らず、人災やライフスタイルを含めた身の回りの危険について話し合うことができます。参加者はゲームを有利に進めるため、自身の防災にまつわる体験談や考えを積極的に話します。例えば、「自宅にいるときに強いゆれが起こった」のお題であれば、「東日本大震災のときに自宅にいて、食器棚からお気に入りのガラスが飛出し割れてしまいとても困った(30代 女性)」、「地しんの時にかくれるつくえがなくてとてもこわかった(小学3年生)」といった個々の体験に基づいた

話がなされます。参加者はこのような話し合いをトランプの順番に沿って、「自分の番は話す番、相手の番は話を聞く番」と、話し手と聞き手が交互に入れ替わりながら繰り返し、防災を自分事に捉えます。

世代を超えてトランプを楽しみながら、互いの体験談や考えを共有し、地域に眠る防災の知恵が伝承され、異なる世代の考えや視点に触れることで互いの防災意識を高めながら、地域交流が促進される点が取り組みの特徴となっています。

既存の防災訓練や防災セミナーは有益な情報を多く含む一方で、若い世代や子どもが参加しにくい一面があります。まずは楽しく話し合う場づくりから始めることで既



開発した防災トランプ



笑顔のある防災訓練



世代を超えて防災を楽しく話す場づくり

存の防災訓練や防災セミナーの導線的な役割を果たすことができると考え取り組んでいます。

3 取り組みの経緯

こうした取り組みを始めたきっかけは、東日本大震災発災直後の3月に宮城県南三陸町で救急医療チームのコーディネーターとして調整業務に従事したことでした。被災地における一連の活動から「能動性（自分で気づき、考え、行動することを前提に様々な人と協力する態度・姿勢）」が防災教育において重要であるとの考えに至りました。初めは自身の体験を伝える活動を行っていたのですが、私が一方的に体験を伝える講義形式であったため、参加者が「能動的」になる手応えがありませんでした。この失敗を踏まえ、「防災をテーマに参加者がいかに能動的になれるか？」という視点で冒頭に挙げた2つの課題に取り組むことにしました。そして、地域に住む様々な人が楽しく参加できる工夫として、防災トランプを開発し、防災をテーマにした対話の場づくりに取り組んでいます。

4 取り組みの成果

これまで全国各地で250回以上のワークショップを開催し、1万3,000人以上がこうした場づくりに参加するとともに、参加者はトランプを楽しみながら防災について



プレイリーダーの育成

能動的に考える機会を継続的に作り出しています。また、場づくりを担える人材として、300人を超えるプレイリーダーを育成することで、様々な地域への展開と定着を可能にし、世代を超えた交流の場の創造、地域住民の自助共助の促進に寄与しています。

5 今後の展望

引き続き本活動を継続していくとともに、「地域に住む外国人の母親」を対象に「やさしい日本語で防災や生活情報を楽しく学び日本人の母親とのつながりをつくる活動」と「障がい（重度含む）をお持ちの方」を対象に「地域の様々な方と防災を楽しく学び、災害時に必要な支援を自ら伝え地域で備える活動」に取り組めます。スペシャルニーズを持つ方々とともに新教材や場を開発しながら「一億人 自宅で防災訓練実施」の実現を目指して取り組みを進めていきます。

